

5. 保健所における特定疾病型機能訓練事業への作業療法士の関わり

ーパーキンソン病患者を対象としてー

赤松 智子
(作業療法学科)

パーキンソン病は、原因不明で治療法は確立されておらず、本人及び家族が、病気やその症状を理解し受容することは困難な場合が多い。また、病気は慢性及び進行性であることから、療養は長期化し、精神的、経済的な負担が大きい。

病気についての理解を促し、早期より寝たきりや閉じこもりがちにならないよう、本人と家族を含めたQOLの維持向上のための健康教育が必要である。京都市右京保健所では、平成10年度より、パーキンソン病患者とその家族を対象とした特定疾病型機能訓練事業を行っており、スタッフとして関わっている。

平成11年度の事業紹介と作業療法士の役割について報告する。

対象は、パーキンソン病患者13名（男性5名、女性8名、平均年齢66.5±6.8歳）とその家族12名（男性4名、女性8名、内訳は、夫4名、妻5名、娘1名、姉1名、嫁1名）。本人に対しては、ADL、QOL、抑うつ気分について、家族に対しては介護負担度と抑うつ気分についての評価を事業実施時と修了時に行った。

事業は、1年単位で1ヶ月に2回教室を開き、病気についての理解を深めるための話や実習、日常生活における工夫、家庭において実施可能な創作活動や棒体操、患者間及び家族間の交流や情報交換の場の提供を主な内容として実施した。また、将来的な自主グループ化を考慮し、前年終了者との合同交流会も設けた。評価より、対象者のニーズに応じて個別相談や訪問相談を行った。

パーキンソン病患者と家族に対する機能訓練事業における作業療法士の役割としては、ADLやQOL評価から、活動レベルや社会参加の状況を把握し、個別のニーズ（運動方法、生活

の工夫、趣味活動など）に応じた介入。訪問相談を通して、家屋状況の評価を通して住環境改善のための提案や自助具利用や社会資源利用についての情報提供。抑うつ傾向が強い場合は、医療との連携や家族も含めた心理支持的な介入が必要である。

6. 院内感染に関する研究

斉藤 ゆみ
(看護学科)

日本で院内感染の問題が大きくクローズアップされるようになったのは1980年代以降、全国の大中の病院で発生したメチシリン耐性黄色ブドウ球菌（MRSA）の院内感染が契機となっている。

その後、1990年代になっても院内感染の蔓延は収まる様子を見せず、感染の起因菌はますます多剤耐性化の一途をたどっていった。今回は著者が1980年代初期から院内感染問題に目をむけ、院内感染問題に研究的に取り組んできた結果を紹介した。

まず、小児病棟に入院中の患児の尿中のサイトメガロウイルス（CMV）の検出率を調査し、院内感染発生のリスクについて明らかにした。CMVの尿中検出率は28.6%と高率で、特にCMVの感染症の患児からは高濃度のCMVが排出されていた。またCMVは自然乾燥下では24時間経ってもそのほとんどが生残していることから小児の一般病棟でも排泄物の管理がずさんになれば院内感染は十分起こり得る事が証明された。

院内感染の防御で最も重要な事の一つに起因菌の増殖場所（レザバー）の特定とその除去がある。そこで、まず、看護婦の手指細菌の調査とICUにおける手荒れ対策を実施した。その結果、看護者の手指は特に手荒れの場合に正常細菌叢が攪乱され、病院内の環境菌、例えばMRSAや緑膿菌などが増殖していることが判明した。またICUなどでのブラッシングや頻回の消毒薬の使用などは手荒れを引き起こし、逆効果である事が分かった。手荒れ対策として超